ボルツァーノの哲學

中川得立

一

哲學は他の諸科學と異り最も嚴密なる批判の上に立たねばならぬ。哲學の出立點には如何なる獨斷もあるを許されない。近世の哲學がデカルトに始まつたといふのは此意味に於て種々なる問題を吾々に呈示する。デカルトが近世哲學の初頭に立つてゐるのは必しも彼れの哲學が他の如何なる哲學にも先驅するといふ意味ではあるまい。哲學史上における彼れの意義は最も嚴密なる批判哲學の發足點を確定せんとした點にあらう。すべてのものを疑ふのは凡てのものに信ぜんとする哲學的要求の出立點である。あらゆるものが疑はしいといふのはあらゆるものに賴らんとする批判的精神の第一歩であらう。認識論的哲學にとつては單なる外界の實在は第一の疑點とならねばならない。然しながら疑はれたる實在は疑ふ我に比べて何等の弱小をも歎くに足らぬ。疑ふ我は疑はれたる實在と同じやうに一の

存在であらう。外界の實在が疑はるべきものとすれば同じ意味に於てそして同じ程度に於て疑ふ我の存在も疑はれねばなるまい。我が存在する故に我が考ふるのではない。我が考ふる故に我が存在するのである。我が考ふる故に我が存在するのではない。考へる我が存在するのである。考へる「我」が存在するのではない。「考へる我」があるのである。最も直接なる經驗には我とか物とかの區別はない。我の存在は物の實在と同じやうに疑の的とならねばならぬ。最も純粹なる經驗にはたゞ考ふる我があるのみである。我があつて考へるのでもなく物があつて我が表象するのでもない。最も確實なる經驗には表象する我があるのみである。ボルツァーノの言つたやうに「吾々が存在する故に表象の有することを知るのではない、吾々が表象を有するが故に存在することを知るのである。存在を有するものが表象するのではなく、表象を有するものが存在するのである」(Bolzano: Wissenschaftslehre I §42 S176)表象を有するといふ判斷には必しも判斷する人の存在の豫想せらるる必要はない。表象があるといふ意識には直ちに表象の模寫すべき實在を假定するの要を見ない。吾々に最も直接なる體驗にはたゞ表象そのものがあるのみである。ボルツァーノの表象自體(Vorstellung an sich)といふのはかくの如き直接經驗と如何なる關係を有する

であらうか。彼れの言ふ文章自體(Satz an sich)は最も純粹なる此意味に於ての考ふる我ではないか。考ふる我の意識は必しも我の存在を前提するものではない。我の純粹なる概念は何等かの表象を意識する或ものゝ概念でなければならぬ。この或ものが我の存在であるかどうかは直ちにこの概念の中にふくまれてはゐない。この或ものが實在の模寫であるかどうかは必しもこの概念の要素をなさぬ。ボルツァーノの表象自體が二つの側面に於て實在の羈束を脱してゐるといふのも恐らくこの意味に於てゞあらう。二つの側面といふのは一方に主觀的心理作用を意味し、他方に形而上學的實在を指すのである。文章自體とは外に超越的實在と區別せられ、内に心理作用とも分離せられたる命題そのものである。ボルツァーノに從ても文章自體とはそれが人によつて口にせられ、我によつて考へらるると否とに關らず常に或ものを言ひ表した命題を意味するのである(W. I. S. 77)。表象自體とは實在の附與する對象であつてはならぬ。存在を有する文章は考へる人の意識に於て成立する。寫象する人の意識に存立しない表象にして猶何等かの實在を有するものがあるとすれば、それは盡く形而上學的實在に數へられねばなるまい。表象自體は此等の孰れにも屬しないのである。ボルツァーノは此點から見てカントの哲學に於て

もこの二つの點の未だ明瞭になつてゐないことを批難する。そして考へる人の存在と、表象を觸發する外界の實在――物身體といふが如き――とを前提する點に於てカントの哲學の未だ徹底せる批判に出でざることを攻擊する。ボルツァーノの出立點はデカルトの哲學である。デカルトの發足點は凡ゆるものを疑ふことゝ疑ふべからざる或ものを見出すことゝであらう。如何なるものがあるかは疑ふべからざるものゝ何たるかを知つた上でなければならぬ。哲學の對象は疑ふべからざる或るものゝ領域である。かくの如き眞理が果してあるであらうか。眞理と言つても物についた眞理でもなければ我によつて考へられた眞理でもない。ボルツァーノは此の如き眞理を眞理自體(Wahrheit an sich)と名けて此のものゝ存立と及びその認識とを以て彼れの知識學の基礎論を定めやうとするのである。

二

ボルツァーノによれば眞理自體といふのは文章自體の一種である(W. I. 112)。文章自體とは前にも言つたやうに何等かの言ひ表されたる命題を意味するのである。「神は常住である」といふのは一の文章自體である。何となれば此等の言葉は何等か

の或ものを――此場合に於ては眞なる或ものを主張してゐるからである。「四角は圓い」といふのも一の命題である。何となれば此言葉の結合はなるほど誤つた事柄と正しからざる事實とを意味してゐるが猶何ものかを言ひ表し、何等かの或ものを主張してゐる點に於て一の命題と言ひ得るからである。これに反して「常住なる神」とか「圓い四角」とかいふのは命題ではない。それは或るものを表象するが何ものをも主張してはゐない。嚴密に言へば「圓い四角」といふのは僞でも眞でもない。「圓い四角」を僞であると言ふのは「四角は圓い」といふ命題を暗に考へて始めて言へることなのであらう。眞僞は常に命題の屬性である。眞理自體は文章自體の一種である。それで眞理自體の特質を明にするためにもう少し命題自體の性質を調べて見やう。

文章自體は文章の意味である。(W. I. S 121)。文章の意味は之を言ひ表す命題とは別のものである。文章は或ものを言ひ表す命題ではあるが文章自體は之をあらはすものゝ表現と存在とには依存しない。表現といふのは文章を構成する言葉や文字である。存在といふのは文章を考へる人の意識である。文章自體が自存するといふのは一方に之を言ひ表はす言葉とは無關係であり、他方に之を考へる人の意識から獨存するといふことである。言ふまでもなく文章自體も言葉によつてのみ言

ひ表され、意識に於てのみ考へらるゝものであらう。この點に於て文章が表現と存在とに無關係であるとは直ちに言へない。然しながら言葉によつて言ひ表さるゝが故に、文章自體はやがて表現と同一であらうか。考へられたる文章と文章其ものとは必しも同一不二ではない。ライプニッツの言つたやうに凡ての命題は必ずしも凡てが考へられる必要はない。考へられたる命題は必ずしも命題の凡てゞはない。Propositio といふことは Cogitatio possibilis といふ意味である。文章とは考へ得るもの、思想の內容となり得るものではあるけれども考へられたもの、思想の內容となつたものがやがて文章の全體ではない。文章自體とは一の命題の意味を言ふのである。この意味が人によつて考へられるか否か、言葉によつて裝はれるかどうかは文章自體の本質をなさぬ(W. I. S 77)。文章自體には如何なる實在も附隨しない。意味があるといふのは意味が實在するといふことではない。この點に於て文章自體は判斷とも異つたものである。ボルツァーノによれば判斷は未だ純粹なる命題自體ではない。判斷は思惟作用をあらはす心的實在にすぎぬ。文章自體は判斷とも思惟とも異るものである。たゞ判斷でも思想でもないがそれは常に判斷と思想とによつて取扱はれると言ふことを忘れてはならぬだけである。

文章自體が上に言つたやうなものであるとすれば、眞理自體といふのは――文章自體の一種なる――如何なるものであらうか。眞理といふ言葉には種々の意味があるが(ボルツァーノは凡そ五種の意味を數へ上げてゐる、一抽象的客觀的、二具體的客觀的、三主觀的、四集合的、五偶然的等、知識學第一卷一〇八頁―一一一頁)彼れの言ふのは客觀的眞理を指すのである。眞理自體とは或ものを如實に言ひ表す命題の一種である。この命題が或る人によつて實際に思惟せられてもせられないでも、言表せられてもせられないでも、それは一向差支へない。客觀的眞理は我によつて意識せられ、人によつて考へらるゝものではない、我の表象にもなければ他人の思惟中にもないのである。(Ulrich: Objective verum est, quod revera ita se habet, nec me, nec alio cogitante; nec visi mei aut alius ratione habita. Inst. Long. et Metaph. Ed2. 1792)まとめていへば眞理自體とは第一に文章自體の一種である。第二にそれは如何なる實在をも有つてゐない。眞理そのものは場所とか時間とかの定性に羈束せらるるものではない。或る所に或る時に或る人によつて考へられたる眞理は眞理そのものではない。眞理自體とは如何なる人が如何なるときに考へても常に同一なるものである。眞理自體は啻に考ふる人の個性によつて左右せられないのみならず、神によつても自由にはせら

れないのである。或ものは神によつて認めらるるが故に眞となるのではない、それが眞なるが故に神によつて認めらるゝのである。神は自らを全智なりと考ふるの故に全智となるのではない、神は全能なるが故に自らを全能なりと考ふるのである。(W. I. S. 115)

・それでは此の如き眞理自體が果してあるであらうか。あると言つても實在するといふ意味ではないがとにかく上に言つたやうな眞理そのものが果してあるかどうかが問題となつて來る。ボルツァーノによれば少くとも一つはたしかにあると言ふ。何となれば如何なる命題も眞ではないといふ主張は既に一の眞なる命題であるからである。世には眞理といふものがないといふことが眞であるとするならばかくいふ言下に眞理の存立が既に主張せられてゐるからである。若し眞に眞理がないものとすれば眞理がないといふことも眞理でないはづであらう(WI. 145)。苟しくも或る主張をなす以上はそこに何等かの眞理を豫想してかゝらねばならぬ。「余の斯く主張することは誤つてゐる」といふ命題を裏切るものは「余の斯く主張することが正しい」といふことではない「余の斯く主張することを主張する」といふことである(WI. 80)。主張するといふのは眞なりと主張することである。誤れることを主張

するのは誤なりと考へ同時に眞なりと考ふることであらう。第一の命題を撞着せしむるものは第二の命題に非ずして第三の命題でなければならない。眞理がないといふ主張はこれを主張する刻下に立言の眞意を沒するものと言はねばならぬ。故に眞理は少くとも一つはたしかにあることが明である。

然しながら眞理は單に一に限られてゐない。ボルツァーノによれば眞理は無數に多く――更には無限にあると言ふ。何となれば眞理は唯一つあるといふことが眞であるとすれば、眞理は唯一あるといふ命題の外に如何なる眞理もないといふことになる。この文章は明かに初の命題(眞理が唯一つあるといふ命題)とは異つたものである。そして初めの命題が眞であるとすれば第二の命題も同じく眞でなければならない。從つて「眞理はたゞ一つある」といふ眞理の外に「眞理はたゞ一つあつて外に眞理はない」といふ第二の主張が生れる筈であらう。これは明に一の新しき眞理である。若しこの第二の主張が眞理でないといふならば第一の命題の外に第二の命題がないといふことになる。第二の命題がないといふことはやがて第一の命題の外に他の眞理があるといふことにならう。故に第二の命題が眞でないといふのはやがて第二の眞理のあることを主張する所以である。第二の命題を否定すること

とは之を否定する刻下にその存在を肯定するものと言はねばならない。この事は第二の命題が一の獨立なる眞理であることを證してあまりあらう。故に眞理は更に二つあることがわかる。

眞理が二つあることがわかれば三つあることも直に明かになる。何となれば上と同じ考へから、眞理はたゞ二つあるといふのは此の二つの眞理の外に如何なる眞理もないといふことであらう。然るにこの命題は明に初の二命題とは異つた第三の眞理である。從つて眞理は更らに三つあるととなつて來る。一般にn個の眞理があれば必ず$n+1$個の眞理があるにきまつてゐる。故に眞理は無限にあると言ふ。

さて眞理が斯くの如く無限にあるとわかつても吾々は果して之を捕捉し得るであらうか。吾々の認識し得ない眞理は如何なる懷疑をも救ふに足らぬ。從つて眞理の認識可能性が次の問題となつて來るのである。ボルツァーノによれば眞理はたゞにあるのみでなく認識し得るものである。判斷は眞理自體の捕捉である。判斷といふのは單なる表象とは本質上異つた精神作用である。それは自らに實在をもつてゐないが吾々の意識中に存在するものである。吾々はこの判斷に於て少くとも一の眞理を捕捉するといふ(WI. 154—172)。眞理を捕捉し得ないといふのは疑ふと

いふことである。疑ふといふことは或る命題を表象してゐるが之を斷定すべき充足なる理由を見出し得ないことであらう。從つて疑ふ人には或る一定の眞理を疑ふ人と凡ゆる眞理を疑ふ人との二種があるわけである。前者は單に或る眞理を疑ふのみであるから今の問題とはならぬ。凡ゆる眞理を疑ふ人は果して凡ゆる眞理の認識を否定するものであらうか。凡ゆるものが疑はしいと言ふのは既に一の判斷であらう。一の判斷を下す人は何等かの意味に於て眞理の捕捉を豫想せねばなるまい。如何なる眞理をも許さない人は判斷することもできぬ。

眞に眞理を認めない人は疑ふといふことすらできない筈である。リッケルトの言ふやうに疑ふといふことは問ふことである。問ふといふことは此斷定が眞か反對の斷定が眞かといふことである。孰れか一つは眞であるが一つは必ず眞でなければならない。眞理が認め得るといふことは他によつて論證せられ得るものではない。論證といふのは眞理によつて立つものであつて、眞理は論證によつて得らるゝものではない。此點から見てセクスツス、エムピリクスが眞理の存在を否定したのは誤つた議論である。曰く、眞理があるといふことを主張するのは論證によつてか或はよらないかの孰れかであらう。論證によらないものとすれば同じ理由から眞理

は存在しないと言ひ得る筈である。論證によつたものとすればそれは更に眞なる論證によつたものか僞なる論證によつたものかの孰かでなければならぬ。若しも僞なる論證によつたものとすれば言ふまでもなくこの主張はなり立たない。若し眞なる論證によつたものとすればこの論證の眞なることは如何から知り得るのであらうか。吾々は之を他の論證によつて知ることはできない。何となれば他の論證は更に他の論證を要し、かくて無限に至つて止まないからである。と。然しながらボルツァーノの考へによれば一の論證の眞なることは他の論證を要するものではない。一の論證が眞であれば吾々は茲に確證するのである。眞理は論證によつて成立するものではなく、論證が眞理の上に行はるゝのである。故に吾々は少くとも一つは眞理を認め得ると言ふ。

一の眞理の捕捉し得ることがわかれば多くの眞理の認め得ることも容易に知ることができやう。何となれば或人が一の眞理を認めてゐると言ふならば吾々はその人に對して「一の眞理を認めるといふことは一の眞なる命題であるか」と尋ね得るであらう。この問ひは疑ひもなく直に肯定せらるるにちがひない。肯定せらるるといふのはこの命題がそれ自らに眞なるのみならず、その人が此の命題の眞理を認

識するといふことであらう。そして一の命題の眞理を認めることはその命題の眞理とは異つた一の眞理であるといふことに思ひ及ぶとき吾々はやがて多くの眞理を認め得るといふ主張の僞ならざることを覺るであらう。かくして吾々は如何に多くの命題を認識しても更に之を反省することによつて常に新しき一の眞理を加へることができる。凡ての眞理を認識し得たと言つてもかくいふ判斷は更に一の新しき眞理であるから吾々は無限の眞理を認識することができるのである。(W.I. 174)

然しながら吾々が眞理を認識し得るといふことがわかつても、吾々の捕捉した命題が盡く眞理であるかどうかはわからない。吾々は誤るといふことがないであらうか。吾々の認識は盡く誤りでないであらうか。誤といふものが實際にあるとすれば眞と僞とは如何にして區別せらるゝのであるか。然し假りに凡ての判斷が僞であるとしても、凡ての判斷が僞であるといふ判斷だけは僞であることができない。之をしも僞りであるといふならば凡ての判斷が僞であるといふことも僞りでなければならないからである。故に吾々の捕捉する眞理が盡く僞であるとしても一つは必ず眞でなければならぬ。

かくの如き議論は循環論證であると批難する人があるかも知らぬが、そう見えるのはたゞ、吾々の茲に證明すべき命題が證明の根柢となつてゐる前提と同一種のものであるといふ理由からにすぎない。わかり易くいへば凡ての判斷が僞であるとしても斯くいふ判斷だけでは正しいと言ふのはかくいふ判斷を判斷し得る(認識し得る)可能性を許してゐるから循環論證であると言ふのであらう。なるほど一般に眞理を認識し得る能力がないならば吾々は判斷によつて眞理を捕捉することができないことは明である。然しながら其れ故に吾々は何よりも先づこの能力のあることを確信せねばならぬといふわけはない。判斷する能力があるから判斷することを知るのではない。吾々が判斷するから判斷する能力のあることを知るのである。眼があるから見るといふことを信ずるのではない、實際に見るから眼のあることを推定するのである。(WL. 178)。

然しながら吾々の認識が盡く僞でないといふことがわかつても、此等の判斷が盡く眞であるといふことは同時に證明せられてゐない。事實僞なる判斷があるかもしれないのである。それではかくの如き判斷の眞僞を區別すべき標準は何であらうか。吾々は何によつて眞理を眞理として認めるのであるか。此の問題に對する

ボルツァーノの答へは極めて不明瞭である。一の判斷は吾々が之を檢査するに從つて愈自證するときは信をおくに足るものとならう。吾々はこれによつて誤ることはないと言ふ(WL. 190)。檢査するといふのはこの判斷に一見反對した種々の表象を注意してみることである。かくすることによつて僞なる判斷も其の誤謬を暴露せずにはおかないと言ふ。つまり眞僞の區別といふのも吾々に最も直接なる明證に依るといふことになるのである。

かくの如き標準が眞理自體とは如何なる關係を有するか。吾々の認識が自存的眞理の捕捉にありとすれば誤謬もそれ自らに誤謬ではないだらうか。眞理が直接に判明なりとすれば誤謬も同じやうに判明ではないか。更に深く溯つてはかくの如く眞理と實在、文章と存在とを峻別することには何等の疑ひをも挾み得ないほど完全なる解決が得られてゐるかどうか。吾々は玆に種々なる問題を起すことができるが、その前に先づボルツァーノをして言はんとする所を充分盡さしめて置きたいと思ふ。

文章は之を組成する表象から成り立つてゐる。表象とは文章の要素をなすものである。知識學の要素論は從つて表象の研究となる。文章自體があるとすれば同じやうに表象自體といふものもないであらうか。先づ表象自體とは何であるか。カーユスは賢いといふのは一の命題である。カーユスといふのはこの命題の一部分であつて全體ではないがそれ自らに或ものを意味する表象であらう。表象自體とはかくの如き言葉の意味を言ふのである。故に表象自體とは第一に文章の要素をなすものである。第二に如何なる實在をも有たないものである。普通に表象といふのは知覺とか思惟とかいふ精神作用と相列んだ心的現象を指すのであるが、表象自體が之等のものと全く異なることは言ふまでもない。主觀的表象は一定の時に一定の個人によつて表象せらるゝ實在物である。客觀的表象はかくの如き主觀を要するものではない、之を表象する人の有無に係らず常に或ものとして存立するのである。從つて主觀的表象は無數であるが言葉の意味する客觀的表象は常にたゞ一である。二の客觀的表象が相等しいと云ふのは無意味である。等しいといふのは二の主觀的表象が同一の表象自體を表現するときに言ひ得ることであらう。客觀的表象が實在でないと言ふのはこの意味に於て吾々の意識に依存しないとい

ふことである。表象自體には如何なる主觀によつても意識せられないものさへある。例へば去年伊太利全國に熟した葡萄の數といふ表象はたとへ之を數へる人がなくとも優に存立する表象自體である。

次に表象自體は對象とも異つてゐる。對象とは表象の指示する或もの――この或ものは實在でも非實在でもよい――を言ふのである。實在する對象が表象と異ることは容易に知り得るであらう。太陽が存在するといふのは太陽の表象內容があるといふ意味ではない、內容とは全く異つた或ものが存在するといふ事である。希臘の哲學者といふ客觀的表象はソクラテス、プラトー等の對象と異ることも明であらう。然し實在しない對象のときでも表象は猶對象と同一視することはできぬ。例へば「命題」といふ表象は主格と賓辭と連辭とから成立する或ものゝ謂ひであるが對象はピタゴラスの定理とか運動の法則とかである。

表象自體と對象との異ることは表象自體には對象のないものがあるのを見ても明であらう。「無」(ニヒツ)といふ表象のごときはそれである。圓い四角とか青い德とかいふのも之れに照應すべき對象をもつてゐない。また表象にして數個の對象をもつものとか無限個の對象を有するものとかゞあるのを見ても對象と表象自體との必ず

しも一致しないことを見るのは易い。例へば一と十との間の凡ての數といふが如きは八の對象を有つてゐる。$\sqrt{2}$といふ表象の如きは無限個の對象をもつてゐるのである。同じ事實を證明するために吾々は之を逆の方面から考へてもよい。卽ち二つ以上の表象が同一の對象を有することがある。例へば墺太利のザルツブルグにある町といふ表象とモツアルトの生地といふ表象とは互に異つた或るものを意味してゐるがしかも同一の對象を命名してゐるのである。表象自體としては同一でないが指示する對象は一つである。この事は實在しない對象の場合でも同じやうに言ふことができる。例へば嚴密なる幾何學的意味に於ての圓は實在するものではないがこれに對する表象は一二にして止らない。例へば圓を定義して一定點から等距離にある點の軌跡と言ふこともでき又之を$(x-a)^2+(y-b)^2=r^2$といふ方程式を以てあらはすこともできやう。(Twardowski: Zur Lehre von Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen: S. 32)。以上の如く一の表象に多くの對象が照應し、一の對象に多くの表象が相應するといふことはやがて表象と對象との異ることを證するに餘りある。兩者が全一のものであるとすれば一者があつて同時に他者が存在しない筈がないからである。そしてかくの如く兩者の同一ならざる事を主張するのは表象自體が

あくまでも實在でないといふことを明にせんがためである。對象には實在しないものもあるが實在の領域が對象の本領であることは爭はれない。ボルツァーノに於てはこの傾向が殊に著しい。表象自體はかくの如き對象と明に區別せられねばならぬ。この點を更に明にするために兩者の部分を比較して論じて見やう。

地上の生物といふのは一の複合表象である。この表象は地上に住んでゐる生物といふ意味であつて其要素として文章をもつてゐる。文章が表象の要素となるのは如何なる意味であらうか。表象は却つて文章の要素ではないか。表象が文章の要素となり文章が表象の部分となるのは表象の部分が對象の要素と同一でないことを證して餘りあらう。表象の部分と對象の要素との互に異ることは次の三點から論ずることができる。第一に表象の要素があつて對象の部分のないものがある。例へば山のない國といふ表象に於て表象の要素としてあらはるゝ山は對象の部分に相應しない。第二に對象の要素をなすものにして表象の部分にはないものがある。例へば等邊三角形といふ表象の如きものがそれである。何んとなれば等邊三角形は對象としては必ず等角三角形であるが表象にはこの要素があらはれてゐないからである。第三に對象の要素と表象の部分とが互に逆になつてゐるものがあ

る。例へば人の眼といふ表象に於ては人は眼の要素であるが、對象に於ては眼が常に人の部分である。この場合には兩者共に部分を有するがその關係は恰も逆になつてゐるのである。表象と對象とは全體より見ても部分より比べても多く一致することのできないものである。兩者の完全に一致するのは表象の指示する對象が唯一つあるときのみであらう。此の赤といふのは單一なる表象である。單一なる表象は直觀である。直觀が概念と異るところはそれが唯一の對象をあらはす點にある。直觀とは多くの要素に別たれ得ない單一表象を意味するのである。それでは直觀は對象と同一であつて、表象自體でないではないかと疑ひ得るであらう。然し直觀は依然表象自體であつて對象ではない。「此の」といふ言葉は唯一の對象に關係するが同時に此の赤にも此の青にも適用し得るであらう。此の赤といふ表象は對象の赤とは異つた表象である。表象自體とはリッケルトの言ふ所與性の範疇に當嵌められた直觀である。表象自體としての直觀は一方に對象の赤に關係するが他方に赤そのものゝ一般性を含んでゐるのである。

直觀はたゞ一つの對象に關係するが概念は多くの對象に對應する。概念と對象との關係は論理學に言はるゝ外延と內包との問題であらう。ボルツァーノはこの點

について普通の論理學とは異つた興味ある見解をのべてゐる。形式的論理學の教ふる所によれば概念の內包と外延とは常に反對の方向に增減する。然しボルツァーノによれば之は謬論である。內包の增大には必しも外延の減少を伴はない。例へば圓い球といふ概念は內包の增大せるにも係らず外延は減少しない。のみならず內包の增大が却つて外延の擴大を伴ふ概念すらある。例へば全歐洲語を解する人といふのと現代の全歐國語を解する人といふが如きはそれである。何となれば現代の歐國語を解する人は希臘羅典等の死語を解する人よりも多いからである。又青い色と青い植物性液汁から作られたる色といふのもこの例である。これ等の點についてはクライビッヒも指摘したやうに種々の難點があらう。(Kreibig : Über eine Paradoxon in der Logik Bolzanos. Vierteli. f. wiss. Phil. u. Soziologie. Bd 28. S. 375—391) 第二の例もよく考へて見ると「現代の」といふ形容詞は人にかゝるのでなく歐洲語にかゝるのであるから現代の全歐洲語は全歐洲語よりも外延に於て減退してゐることは明である。第一の例に於ても直觀的表象としての球は圓いといふ形容詞によつて內包を充實するかもしらぬが幾何學的球について言へば圓いといふことは必しも內包を新しく增大するものでないとも考へ得るであらう。然しながら內包と外延とを

單なる抽象と見ず一層深い意味に考へて質と量との關係を見るときは必ずしも形式論理學の教ふる反對の關係は成りたつ必要がないとも考へられる。概念を內包的に見るのは物の全體から質的方面を考へることであり、外延的に見るのは個物を單位として量的側面をはかることであらう。然し性質的見方と量別的見方とは互に相排するものであらうか。量が量として存するにはその根柢に質的見方を豫想してゐるのではないか。何等の質をも考へない量はすべてが渾一となつて量が量としても存立し得ない筈であらう。故に少くとも質を增加することは必しも量の減退を誘致するものでないと言へる。このことはドロービッシュも指摘した所であり、ボルツァーノの考への卓れたる點ではないかと思ふ。

九

上に言つたことで、ボルツァーノの主張が大體わかつたものとしてもう一度前にかへり玆に提起された種々なる問題を考へてみやう。一見すればボルツァーノのやつたことはカントの所謂コペルニクス的偉業をもとに引きもどしたやうな觀がある。カントは知識の客觀性を主觀の統一作用に求めた人であるとするならばボルツァー

ノは之を純粋なる客觀的眞理の中に求めた人と言ふことができやう。ボルツァーノの哲學の中軸は客觀的眞理と客觀的表象との概念である。客觀といふのは一方に吾々の心的作用をはなれ、他方に超越的實在とも區別されるといふことである。今內在論の立場をとつて一切が內在的存在であるといふならば客觀的眞理とは凡ゆる心理的作用からかけはなれた一の超越的事象と見ることができる。眞理自體は考へられた眞理とか意識された文章とは本質上異つたものである。一者は他者を待つて存するものでなく他者は一者によつて立せらるゝものではない。心理作用は知識の形式にして眞理自體はその內容である、內容としての文章自體は必しも形式の構成をまつて成立するものではない、客觀的眞理はそれ自らとして獨存する自體であると言ふ。眞理とか表象とかゞ果してこのやうなものとすれば吾々は如何にして之等を捕捉し得るであらうか。認識せられたる眞理は眞理自體ではない。意識せられたる表象は表象自體ではない。捕捉せられたる文章は實在であり、實在を有する文章は文章自體でないからである。(Paldgyi: Kant und Bolzano, S. 34) 眞理自體が吾々によつて捕捉せらるゝためには實在を有たねばならぬ。實在を有する眞理は考へられたる眞理にして眞理自體とは異つたものである。眞理そのものは如

何にして實在となり得るであらうか。兩者があくまで別のものとすればその間に如何なる關係があるであらうか。かりに兩者の仲介に任ずる或ものがあるとしても實在となつた眞理は眞理そのものではない筈である。眞理自體は遂に吾々の認識し得ないものではなからうか。眞理を捕捉することができぬといふのは既に一の眞理を認識したものであると言ふかもしれぬが體得せられた眞理は考へられた眞理であつて眞理そのものではない。認識せられた眞理がやがて眞理そのものであるといふならば吾々の思惟を絶した眞理自體は何等の意味をも有たぬものとならう。表象自體は永久に表象せられたる表象とはなり得ないのではないか。

この難點をさけるためにはボルツァーノにとつて恐らくたゞ一途しかあるまいと思ふ。卽ち眞理自體は考へられたる眞理ではないが考へられたる眞理の中には眞理自體の要素があると言ふことである。然しかくの如き要素があるとしてもそれが考へる意識の中にある限り遂に實在であつて眞理自體たることはできまい。かくの如き言說は認識の心理的見方と論理的見方とを混同したものであると言ふかもしらぬが二の見方を區別するのはやがて意味と實在とを永久に相會せざる平行線上に置くことであらう。論理的見方からは眞理自體しかわからず心理的見方か

らは單に考へる作用しか知るを得ない。故に眞理自體は意識の中にあるものではなく意識によつてあるものである。實在の中にあるといふことゝ實在によつて立つことゝは必しも同一でない、表象の中に表象せらるゝことゝ表象によつて表象せらるゝことゝは直ちに同一のものと見ることができぬ。ブレンタノが言葉の複合に於て單なる屬性的のもの(attributive)と改容的のもの(modificierende)とを區別したのもこれによるのであらう。卽ち善良なる人といふのは單に人の屬性を規定したものにすぎないが死せる人といふのは人の本質を變化したものである。輝ける金剛石と贋の金剛石といふのも此例であらう。のみならず同じ言葉が時には屬性的となり時には改容的となることすらある。例へば此風景は描かれたものであるといふのは一方に彫刻されたものでないといふ屬性的關係をあらはすが他方に風景は實物に非ずして描かれたるものにすぎないといふ改容的意味を示すこともできる。(Twardowski: Op. Cit. S. 13—15) 或ものが意識せらるゝとか表象せらるゝとかいふのも此の意味に於て二の異つた關係を示すものと見ることができやう。ものが意識せらるゝといふのは必ずしも物が意識に改容せらるゝことではない。表象せられたる物とは直ちに表象の作用と同一視することはできぬ。眞理自體が意識せらるゝ

といふものは客觀的眞理が主觀的作用となることではない。表象せられたる表象自體は必しも表象作用と同一ではない。眞理自體は意識の中に沒入するのではなく意識によつて意識せられるのである。碎いて言へば眞理自體が認識せられるといふのは意識によつて所有せられることであつて意識の中にとけこむことではない。表象自體が表象せらるゝといふのは客觀的表象が表象によつて表象せらるゝことであつて、表象作用に解滅することではないのである。このやうに考へると眞理自體が意識せられても必しも實在となるの必要はないわけであらう。客觀的表象は表象せられつゝ猶依然として表象自體たることができる。之を別の方から考へても眞理自體が認識の作用とは全く無關係であるといふのは意識の作用を取除いても又は加へても客觀的眞理には何等の異動もないといふことであらう。從つて眞理自體はたとひ意識によつて意識せられてもそれ故に實在となる必要はない筈である。認識せられたる眞理は實在であつて眞理自體ではないといふのはこの點から見て誤であると言はねばなるまい。フッサールなどが意識を以て何ものかを指示するものと見るのも恐らく此意味であると思ふ。意識が作用としての實在にすぎないならば意識は意識として存立しない筈である。何となれば意識が單なる

實在であるならば何ものをも意識しない意識といふことになり、これは矛盾なしには成立し得ない概念であるからである。意識の本質は何ものかを指示するにある。指示せらるべき或ものは再び意識の一部分であつてはならぬ。實在としての意識は更に指示すべき或ものを要するからである。

然しながら上に言つたことで吾々の問題は盡されてゐるであらうか。眞理自體は意識の中に捕捉せられず意識によつて意識せられるといつてもこの意味の意識とは如何なるものであるか。表象によつて表象せらるゝ表象自體とは果して如何なる表象によるのであらうか。意識によつて指示せられたる意味とはそも〳〵如何なる意識に基くのであらうか。かくの如き意識は依然として實在であるか。若し實在であるとすれば如何なる種類の實在であらうか。かくの如き實在は表象作用としての實在と互に異つたものであらうか。

惟ふに眞理を指示する意識は作用としての實在と直ちに同一であるとはいへまい。作用は作用として單なる作用にすぎないからである。それでこの二つを區別するにはフッサールのやうに意識を全體の作用と見て單なる作用をその中に包攝するか、或はリッケルトのやうに存在の見方からせずして能作(ライスツ)から見るかの孰れかであ

らう。然し孰れの途をとるにもせよ、意識は猶何等からの意味に於て存在するものと見なければならぬのではないか。リッケルトのやうに純論理的に專ら能作から見るにしても、意識の能作といふからは能作する意識の存在を假定せねばなるまい。之をも拒斥するならばたゞ意識性のみがあつて能作といふこともないことにならう。それではかくの如き意識から見て眞理自體とは果して如何なるものになるであらうか。客觀的眞理はあくまでも眞理そのものであつて實在ではない。眞理を指示する意識が單なる實在でないとしても、それが何等かの意味に於て存在する限り猶容易に眞理自體とは相覆ふことができぬ。眞理自體と意識とは此點に於ても猶踰ゆるべからざる溝渠に惱むのではあるまいか。ボルツァーノのやうに眞理そのものをあくまでも超越的と見るからは遂に救ふべからざる難關に逢着するのではなからうか。

かくの如き難點を解くためには兩者を全く別のものと見て二の眞理を許容するか、或は更に何等かの意味に於て之を結合する第三者を想定しないわけにはゆくまい。然しながら想定せられたる第三者は更に左右の側面に於て、種々なる困難に衝突せざるを得ないであらう。所詮ボルツァーノにとつては兩者をあくまでも別のも

のと見るより外に仕方がないと思ふ。所謂概念的眞理と事實的眞理との異別といふのも恐らく此の點に職由するものであらう。概念的眞理とはあらゆる點に於て實在を超越したものである。數學的眞理の如きはその好適例であらう。ボルツァーノの眞理自體もまさしくこの意味に於ての概念的眞理である。これに反し意識によつて立つ眞理は事實的眞理である。直觀によつて意識せらるゝ眞理は事實の眞理である。意識が單なる作用でないにしても猶體驗としての眞理は眞理自體と區別せられねばなるまい。ボルツァーノの立場からは眞理自體を超越的と見る限り兩者の異別をあくまでも徹底するより外はないのである。

然しながら此の如き二の眞理は果して絕對に區別せらるべきものであらうか。假りにこの區別が成り立つとしても概念的眞理は果して實在と無關係のものであらうか。概念的眞理(Vérité de raison)と事實的眞理(Vérité de fait)とを別つことはライプニッツなどの考へをうけたものと言はれるが兩者の區別せらるべき所以は何處にあるのであらう。概念的眞理に於てはそれに對立する眞理は盡く矛盾に陷るが事實的眞理に於ては反對の事實が可能であると言ふ。例へばヒュームの言つたやうに太陽は明白東より上るべしといふのは事實的眞理である。何となれば太陽は明日東

より上らざるべしといふことも優に考へ得る事實であるからである。此の二の事實は必しも矛盾するものではない。一が眞理として考へ得る以上は他も同じやうに眞理と考へ得られる筈であらう。之に反して概念的眞理に於てはかゝる對立の存するを許されない。概念的眞理には自同律が行はれ事實的眞理には因果の原理があてはまる。自同律の行はるゝ所には一の眞理は同時に反對の眞理たることができぬ。眞理自體は常にたゞ一つであつて絶待のものであると言ふ。

然しながら二の眞理はかくの如く根本的に異つたものであらうか。事實的眞理には反對の命題が可能であると言ふのは何を意味するか。フッサールのいふやうに觀念的法則(Ideulgesetz)は事實的法則(Reulgesetz)と本質的に異つたものであらうか。ヒュームの例を見ても太陽の上るといふことゝ上らないといふことゝは嚴密に考へて果して矛盾しないものであらうか。此薔薇は赤いといふのは一の事實的眞理であるが此薔薇は赤くないといふ命題と果して同時にそして同處に兩立するものであらうか。太陽が上るといふことゝ上らないといふことゝは明日といふ未來を置いて始めて言へることである。太陽が上つたといふことゝ上らなかつたといふことゝは過去の一定時に就て同時に主張せらるゝとき明かなる矛盾に非ずして何で

ら う。事實的眞理と雖も矛盾律を無視するものではない。甲が甲であつて同時に非甲でないといふのは啻に概念的眞理の特質ではないのである。

圓は四角でないといふ數學的眞理は赤は青でないといふ事實的眞理と全く別種のものであると言ふが赤が赤であつて青でないのは單に外から與へられた區別ではない、赤が赤として發展するのは同時に自らを青と區別する所以である、區別は外にあるのではなく赤そのものゝ發展の相である。赤が赤として發展するのはやがて赤が自らを維持し同時に他と區別する過程ではないであらうか。

上に言つたことで事實的眞理にも自同律の缺くべからざることがわかつたが自同律は猶直ちに因果の原理とはならぬと言ふかもしれない。なるほど甲が甲であるといふ自同律の世界と甲は乙であるといふ充足理由の領域とは猶容易に同一視することはできまい。然しながら甲は甲であるといふ自同律もそれが單なる言葉の繰返しに非ざる限り何等かの意味に於て或る一般者の發展でなければならぬ。甲は乙であるといふのはかくの如き一般者が自らを明確に限定したものと見ることができやう。多くの人々によつて稱へらるゝやうに與へられたるものは要求せられたものである。此薔薇が赤いといふのは此薔薇といふ甲に赤いといふ乙が外

から加つたものではない。直接經驗としての赤い薔薇が自らを限定したものである。薔薇が赤いといふ事實的眞理は赤い薔薇が赤い薔薇としてどこまでも自己を維持することではなからうか。赤い薔薇が赤い薔薇であるといふのはやがて薔薇が赤いといふことではないであらうか。事實的眞理が概念的眞理と根本的に異つたものと見るのは何れの點からも維持しがたいやうに思ふ。事實的眞理は必しも自同律を無視するものではない。假りに事實的眞理が一に充足理由の原理により概念的眞理は專ら自同律に基くものとしても自同律と充足理由の原理とは本質上異つたものでないと言ふことができる。また事實的眞理は相對的であつて概念的眞理は絕對的であるといふのも正當でないと思ふ。或る場所に於て或時に起つた事實的眞理はその限りに於て絕對的である。某日某所に雨がふつたといふことは誰れが考へても常に同一の眞理である。この薔薇の香が芳烈であるといふのは人によつて異るから相對的だと主張するのは、現象と本體とを別のものと見て一の現象的眞理が他の場合では僞となり得ると考へるからであらう。然しながら或人が此薔薇の香を愉快に感じたといふことは他の人が之を不快に思つたといふことゝまるで別の經驗である。一の經驗が或場合には眞であり他の場合では僞となるの

ではない。或人が快と感じた事實は絶對に眞理である。事實的眞理はこの點からも相對的と見て概念的眞理と區別することはできないと思ふ。

眞理自體を凡ゆる意味に於て超越的のものと見るのは眞理を全く認識の外におくか眞理を別種の二つに區別するかの孰かに終る。眞理を認識の外におくことはどうあつてもできない。眞理を二つに區分しても別たれたる眞理は根本的に異るものでないことが分明しやう。孰れにしても、ボルツァーノの考へには種々なる難點が伴ふものと言はねばならない。

眞理自體が超越的であるとするならば僞も同じやうに超越的ではないか。リッケルトなどはこの問題を價値の內容に關するものとして形式をとりあつかふ認識論に於ては論ずるを要しないものと見てゐるがボルツァーノの立場からは當然之を許さねばなるまいと思ふ。然しながら僞自體とは何であるが。虛僞が吾々によつて捕捉せらるゝのは正しく捕捉せらるゝか誤つて捕捉せらるゝかの孰かであらう。正しく捕捉せられたる場合には虛僞は虛僞でなくなり、誤つて捕捉せられたる場合にも虛僞はやがて眞理とならう。何となれば誤を誤であるといふことは誤であつてはいけない、誤られたる誤はやがて眞理となるからである。命題自體が眞でも僞

でもなく眞理自體は命題自體の一種であるといふのは如何なる意味であらうか。偽自體がそれ自らに存立するものとすれば命題は何故にそれ自ら偽自體でないのであらうか。

表象が正しいとか正しくないとかいふのは(表象については眞偽は言へぬ、正不正がいへるのみである、richtigとはrichtenすることであるWL. S. 517)表象の指示する對象があるかないかによつて定るものであらう。圓い四角といふのは之に對應する對象がないから不正なる表象であると言ふ。從つて命題の眞偽も對象の有無に依存するものと見ることができる。そして表象の對象を客觀(Objekt)とよぶならば命題の對象をマイヌングの所謂「客觀的」(Objektive)と見ることもできやう。然しながら命題の眞偽をかくの如く對象との一致に求めることは果して可能であらうか。

對象といふことを一層徹底して考へるとツワルトウスキーなどの論ずるやうに對象のない表象といふものはないことにならう(Twardowske : Op. Cit. S. 20—29)。命題の眞偽を、對象の有無に求めることは從つて無意味のものとならざるを得ぬ。

眞理自體を凡ゆる點に超越的と見るのは如何なる意味に於ても支持しがたいやうに思はれる。客觀的眞理は思惟の作用と全然無關係のものであらうか。客觀的

といふのは實在としての意識を超越するといふ意味であらうか。意味と實在とがかくの如く無關係のものでないとすれば互に如何なる關係を有すべきかゞ問題となつてくるであらう。吾々はこの大問題の戸口に於てポルツァーノの哲學の叙述をとゞめておきたいと思ふ。